日本音楽学会 2024 年度音楽関係学術イベント開催助成金（第 2 期採択）
シンポジウム「演奏を読む：演奏解析ツールと演奏解析によるテンポ・ルバートの実践分析」
報告記

鷲野　彰子

「演奏を読む：演奏解析ツールと演奏解析によるテンポ・ルバートの実践分析」と題したこのシンポジウムは、科学研究費基盤研究（B）「20 世紀前半の歴史的演奏とピアノロールの演奏解析によるルバート奏法分析」（研究代表：鷲野彰子）の成果発表の機会として開催しました。

作曲家が書いた意図を汲み取って演奏するためには「丁寧に楽譜を読んで、楽譜通り正確に演奏するべきだ」ということがよく言われますが、実際に楽譜上の記載（音価やダイナミクスなどを含めて）一つずつをコードのように読んでしまうと、無機質で硬直した演奏になってしまいます。それらの楽譜上に書かれた記載は、フレーズや曲全体の文脈の中で読み取る必要があります。また、それぞれの時代の人同士が理解していた不文律のようなものを理解して読むことが必要となります。不文律とはいえ、各時代の音楽家が多くの記述や理論書を残してくれており、それが活用できそうですが、演奏でそれを実践しようとすると、演奏者はすぐにまた路頭に迷う羽目になります。それというのも、記述も言葉や楽譜などで表現された記号であり、音に還元する際には、やはりそこに解釈を差し挟む必要が出てくるためです。

それゆえ作曲家が存命中に同じ文化圏で生きた演奏家による演奏録音という「音」そのものの資料を参考にすることは非常に有効な手段といえます。ただし演奏家によってそれぞれの演奏は非常に異なり、それが当時の演奏慣習として理論書等に書かれた記載の実践にあたるのか、作曲家固有の表現なのか、判断に迷う場面も少なくありません。

このシンポジウムは、丁寧に「演奏を読む」こと、そして演奏の読み方をじっくり考えることで、その演奏をどう理解することができるのか、皆さんと一緒に考えてみたい、という趣旨で開催しました。また、そうした「演奏を読む」ための手段としてどのようなツールが使えるのか、という可能性について検討する機会となることを目指しました。そして何よりも、音楽学者と音楽情報処理の専門家が一堂に会して、それぞれがどのようなことをしようとしているのかを共有することにより、両分野の研究者らがこれまでにも増して理解を深め、連携するきっかけとなることを目指しました。

シンポジウムは 3 部構成で実施しました（12 時開始、18 時終了）。第 1 部「演奏解析ツール開発の現在」は、Yucong Jiang（リッチモンド大学）、中村栄太（九州大学）、印藤海翔・山本邦雄・尾下真樹（九州工業大学）、奥村健太（名古屋国際工科専門職大学）の各氏にお話いただきました（Craig Stuart Sapp（スタンフォード大学）は病気のため当日不参加）。第 2 部「演奏解析で読み解くテンポ・ルバートの実践分析」は、高橋舞（日本学術振興会）、上田泰史（京都大学）、鷲野彰子（福岡県立大学）、ヘルマン・ゴチェフスキ（東京大学）の各氏にお話いただきました。第 3 部「ディスカッション」は、コメンテーターとして伊東信宏（大阪大学）氏を迎えて、第 1 部と第 2 部の登壇者

と会場に来られた参加者を交えた討論や質疑応答を行いました。

第３部のディスカッションでは非常に活発な議論が行われ、ときに白熱する場面もありました。例えば、「これらの研究がどこを目指すのか」といった研究の方向性については、過去ではなく未来を目指すべきではないかという意見と、歴史を明らかにすることの重要性を主張する音楽学者の意見とのギャップが顕著に現れました。それぞれの意見は、（少なくとも現時点で）それぞれの分野が向かっている方向を示したものといえ、学際的に協力し合って進める上で互いの理解が必要な部分であることを実感したと同時に、開発研究と歴史研究という、ベクトルが異なる研究の姿勢を浮き彫りにした象徴のようで、興味深く感じました。また、「文学部の学生が演奏解析に着手したい場合に使えるような使用しやすいソフトは何か」というような質問もありました。こうした数々の質問や意見は、互いのギャップを埋めるだけではなく、今後のために何をすべきか、あるいは教育の場面で何をすべきか、そのためには何が必要か、ということを考え直す非常に良い機会となりました。

また、私個人的には、演奏解析をする上での技術的な部分についても意見をシェアできたことが非常に有益でした。討論中にあがった意見の中には、演奏解析研究を進める上で私自身が迷いながら行ってきたまさにそのことについて誰かが意見する、という場面が多々ありました。例えば、「各拍の時間を算出する際に、和音が分散して演奏される場合にはどこに拍があると捉えるべきか」というような話題があがりました。最初に鳴らされた音か、最低音か、最高音か、あるいはその拍に演奏された音の中間の位置とするのか、といったような選択肢が考えられますが、そのいずれを用いるかという問題です。「拍には太い拍と細い拍があると考えている」「旋律の高音部分を拍のある位置として捉えた場合には綺麗なデータがとれるけれど、伴奏部の低音ではあまりうまくいかなかった」といった意見など、私自身がそのように感じながらも自信がもてないままであった考え方にぴったりと合致するもので、自身の感覚への自信に勇気をもらいました。データを扱う場合には、ついつい、曖昧さを排除した絶対的な回答を探したくなりますが、モノを見るためのピントを調節するためには、近づくだけでなく、一度退いてみて感覚と照合させる必要があることを思い出させてくれる機会となりました。そうした意見やヒントの一つずつは迷いを解消したり、解決方法への突破口のようなダイレクトなものではありませんが、立ち止まって再考するためのヒントとなったり、解釈する際の大きな後押しの役目をしてくれそうです。

冒頭で述べたように、このシンポジウムの目的は「演奏の読み方をじっくり考えること」、「ツールの可能性について検討すること」、「音楽学者と音楽情報処理の専門家が互いの理解を深めて連携するきっかけとなること」でした。ハウトゥー（how to)的な答えの提示があるわけではなく、むしろ問題は深まったといえるかもしれません。しかし、私自身がそうだったように、その場に居られた参加者の皆さんにとって、自身の研究を推進するための某かのヒントがあったのではないかという気がしています。科研費課題研究にとっても、今年度が研究期間５年間の折り返しの３年目に当たることから、このシンポジウムには情報の整理や研究の方針確認の機会とする意味も含んでいましたが、想像通り、あるいは想像以上の成果を得られたことを嬉しく思います。日本音楽学会からイベント助成金をいただき、本シンポジウムが開催できたこと、心より感謝申し上げます。